

「薬物依存×女性」

尊厳をもって生きていくためにケアの視点を薬物政策に

合法・違法に関わらず、薬物に依存する女性の多くは複層的な困難を抱えています。例えば違法薬物の使用で収監された女性たちは服役する以前から、ネグレクトを含む虐待、見過ごされがちな障害、貧困や社会的排除の体験、そして親密な関係における DV などがもたらす痛みを、薬物を使用することで生き延びてきました。これらは、個人的な問題として片付けられがちですが、実は、私たちの社会にある多くの歪みが女性たちに反映されたものではないかと考えさせられます。

薬物依存の課題を抱える女性たちが自ら尊厳をもって生きていくためにケアは必要ですが、厳罰偏重の日本の薬物政策では、出所後の社会復帰支援は、女性が薬物依存に至った背景に適切に対応していない非現実的なもので、再犯リスクが高いままです。では日本の薬物政策をどのように改善していけばよいのでしょうか――。

当事者である女性たちの声を聞いていただきながら、堀の中と外をどのようにつなげていくのか、社会の側にいる私たちが出来ることは何かを考えます。参加者のみなさんの疑問や反応にも耳を傾け、NPO 法人リカバリーはこの貴重な対話を、これからの政策提言に活かしていきたいと思っています。ぜひご参加ください。

■ゲスト：ともさん



リカバリーが札幌女子刑務所のなかで 2019 年～2024 年に実施したプログラム「女子薬物回復支援センター」を修了し、現在はパートナー、愛犬と共に生活。自分の特性(発達障害)について理解し、うまくつきあっていきたいと考えている。

■ゆかりさん



「女子薬物回復支援センター」は事情により途中で離脱。現在はリカバリーが運営するグループホームで暮らしながら、就労系の事業所に通所している。AA や NA(依存症者の自助グループ)にも参加しながら、ゆっくり自分の回復をすすめている途中。

■大嶋 栄子さん



NPO 法人リカバリー代表／国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員。北星学園大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程退学。博士(社会福祉学)。精神科ソーシャルワーカーを経て、2002 年札幌市にて、さまざまな被害体験を背景にもつ女性の支援を行う「それいゆ」を立ち上げる。2004 年 NPO 法人リカバリーとして認証され、現在障害福祉サービスを提供する三つの事業所を運営。

昨年 12 月に 2 冊目の単著『傷はそこにある-交差する逆境、越境するケア』(日本評論社)を上梓し、その第Ⅲ部では法務省から受託した女子刑務所モデル事業(2019～2024)について詳解した。

■日時：2025 年 7 月 26 日(土) 13:30～16:00

■会場：オンライン開催

※オンライン会議システム・Zoom を使用。スマホや PC 等のインターネット端末から参加いただけます。参加方法の詳細は、お申込みくださった方に開催前日までにメールいたします。聞くだけの参加も可能ですが、この対話の場を一緒につくれるよう、お声を出していただけたら幸いです。参加者さまのお顔は写らないよう初めはこちらで設定しますが、ご発言の際は自主的にお顔を写していただけます。

■参加費：無料

※先着 50 名様。申込の締め切りは 25 年 7 月 24 日(定員に達し次第、締め切ります)。

■主催：NPO 法人まちぽっと ソーシャル・ジャスティス基金 <https://socialjustice.jp/> メール info@socialjustice.jp

■お申込みページ：<https://socialjustice.jp/20250726.html> ※事前にご登録ください。